

\* \* \* \*

この報告ではアマ科の中の特種な分類群に属する *Hugonia* をあつかい、花の外部形態、横断切片による花部諸器官への維管束の走向を記載した。心皮への維管束が分岐した後にも中央になお中央束が残存することが注目された。

○日本新産の苔類 *Scapania ciliatospinosa* Horik. について (井上 浩)  
Hiroshi INOUE: *Scapania ciliatospinosa* Horik. new to Japan.

服部・井上 (1959) は群馬県谷川岳の苔類フロラについて論じ、その中に *Scapania ornithopodioides* (With.) Pears. を記録した。最近になって、服部植物研究所の水谷正美博士から、この標本の同定がどうも疑問だからもう一度見直したら… という連絡を受けた。科学博物館に収められている谷川岳産のものを再検討した結果、これらは *S.*

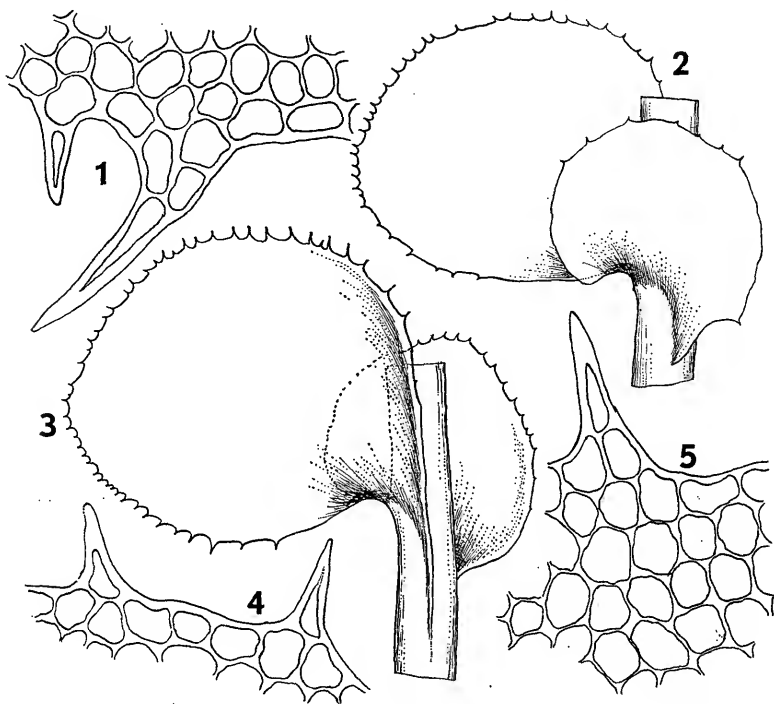


Fig. 1. *Scapania ciliatospinosa* Horik. 1. Tooth on ventral margin of ventral leaf-lobe,  $\times 330$ . 2. Part of shoot, dorsal view,  $\times 20$ . 3. Ditto, ventral view,  $\times 20$ . 4, 5. Tooth on dorsal margin of ventral leaf-lobe,  $\times 330$ . All figs. based on H. Inoue no. 7397.

*ornithopodioides* ではなく *S. ciliatospinosa* Horik. (Journ. Sci. Hiroshima Univ. ser. B, div. 2, 2: 222. 1934) であることがわかった。

*Scapania ciliatospinosa* Horik. は台湾の Mt. Morrison から記載されたものであるが、原記載以降、久しく本種については検討されないままになっていた。1972 年に筆者は台湾の Scapaniaceae の再検討を発表したが、この時、台湾の *S. ciliatospinosa* が Sikkim から記載された *S. ferruginea* var. *minor* Amak. および *S. schiffneri* Grolle と同じものであることを指摘し、分布がヒマラヤ、中国（雲南）、台湾となることを報告した。

*Scapania ciliatospinosa* は葉がいちじるしく離れて茎につき、葉縁の歯がほとんど 1 細胞性のものからなり、葉下片の腹縁基部が長く茎を流れる。植物体は小形で細長く、長さ 1.5~2.0 cm、幅 1.2~1.8 mm ぐらいにしかならないのが普通である。こういう点で、葉が密につき、葉縁の歯が 2—3 細胞性となる、大形の *S. ornithopodioides* とははっきり区別される。

谷川岳産の植物は、台湾やヒマラヤの植物とくらべてやや大形で、長さ 3~4 cm、幅 4.5~5.2 mm となり、葉も少し重なり合うようにつくことが多い。葉の細胞は中央部で  $15\sim 23 \times 15\sim 25 \mu$  とやや大きくなる。しかし、このような差は変種とか亜種として区別する程のものでもない。

日本で本種を確認したのは現在のところ谷川岳だけである。谷川岳以外の地域で *S. ornithopodioides* と同定されたものも全部検討し直してみたが、これらはすべて正しかった。谷川岳は有名な蛇紋岩地で、ここにはいくつかの特殊な苔類が知られている（服部・井上 1959）。なかでも *Pleurozia purpurea* は特筆に値する隔離分布種であるが、更に今回 *Scapania ciliatospinosa* を加えることとなった。日本には本種と同じように、ヒマラヤ—中国（雲南）—台湾—日本といった分布形式をもつ苔類が数多く知られているが、日本国内では石灰岩地とか蛇紋岩地のような特殊な基岩の地域に分布することが多い。

\* \* \* \*

*Scapania ciliatospinosa* Horik. was newly found in Japan as follows: Mt. Tanigawa, Gunma Pref., ca. 1900 m. alt., over humus on serpentine rocks, occurring with several mosses and hepatics as *Plagiochila firma*, *Metzgeria pubescens*, *Nipponolejeunea pilifera*, *Herbertus sakuraii*, *Chandonanthus hirtellus*, etc., leg. H. Inoue nos. 5747, 7411, 7423, 7404, 7397, all det. as *S. ornithopodioides* in TNS. This species has been known from Sikkim-Himalaya, China (Yunnan), and Taiwan.

The Japanese plants are more or less larger than those from Taiwan and

Himalaya; plants are 4.5-5.2 mm wide  $\times$  3-4 cm long, pale greenish brown; the leaves are remote or loosely imbricate, and the dorsal lobes 1.2-1.3 mm wide  $\times$  1.0-1.2 mm long and the ventral lobes 1.8-2.3 mm wide  $\times$  2.0-2.4 mm long; the teeth on leaf-margins are mostly unicellular (but sometimes 2-3-celled at the basal margin of ventral leaf-lobes), and 15-18  $\times$  30-55  $\mu$  (2.0-3.1 times as long as wide); the leaf-cells are 15-23  $\times$  15-25  $\mu$  at middle portion, with medium sized, triangular, acute trigones; the gemmae are very rare, on the apices of leaves near shoot apex, 2-celled, pale brown, 20-25  $\times$  13-16  $\mu$ .

引用文献 服部新佐・井上浩: 谷川岳の苔類, 特に山頂部の蛇紋岩植生について, 服部植研報 21: 85~103 (1959)。井上浩: Studies on Formosan Hepaticae, I. Introduction and Scapaniaceae. Jap. Journ. Bot. 20: 311-327. 1972.

(国立科学博物館植物研究部)

□ HANSEN, C.: *The Asiatic Species of Osbeckia* (Melastomataceae), GINKGOANA No. 4, 150 pp., 20 pls., Academia Scientific Book Inc., Tokyo, 1977 ¥5000. 著者はコペンハーゲン大学の Botanical Museum に属し, このヒメノボタン属の研究はデンマークの東南アジア植物研究の一翼をなすものである。まず特徴となる形質の簡単な説明に続いて, 2種類の検索表が示される。一つは目立った形質を目安として種または種の小グループへ直接到達するもの, もう一つは通常のタイプのものである。次に各論に入り, 種, 変種ごとに同じスタイルの記述が続く, 文献の引用は原記載の出典以外は省かれている。その代り異名についてその基準標本がいちいち引用されている。英文の記相文と著者の見解がのべられ, その後に参照したすべての標本のデータがリストされ, また分布図がつけられている。分類上の大きな異動はなく, 変種レベルで3つの新名と7つの新組合せが行なわれている。巻末に学名の索引と共に Collector 別の標本の索引がある。新見解を盛った本というよりも, 基本データを多く盛り込んだ参考文献である。それにしては引用標本のリストはみな追込みになっていて見にくい。編集の邪魔扱いのような感じだが, 小さい活字は経済上やむを得ないとしても, もう少し見易い形式に組んだ方が利用に便利と思う。(金井弘夫)

□ 湯浅浩史: さし木・つぎ木の楽しみ方 新書版 pp. 159, pls. 4, 池田書店, 東京 ¥480 (昭和52年 VII)。さし木, 接木, 取木の方法と楽しみ方を各見開きの片ページに図解した本で, 内容は従来のものをうまく処理しているが, 特に科間接木として中心子目とサボテン科, それにタデ科とは接木ができるが, ナデシコ科は不可能だとする点は著者の系統追求の実例としてまことに興味がある。(前川文夫)